認知方略での動機づけと対処行動の関係性に関する研究

○藤原洋史¹・岩淵千明²

(¹川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻・²川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学)

キーワード：認知方略，動機づけ，対処行動

Study on relationship between motivation and coping behavior in cognitive strategies

Yoji FUJIWARA¹ and Chiaki IWABUCHI²

(¹KAWASAKI University of Medical Welfare Graduate School of Health and Welfare Master's Program in Clinical Psychology・

²KAWASAKI University of Medical Welfare Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare)

Key Words: cognitive strategy, motivation, coping behavior

目 的

認知方略とは、問題状況に直面した際に、人が目標や行動に向かうための評価・計画・予測・努力などの一定の傾向と定義されている(Norem1986)。その認知方略は期待と前歴の高低によって分類される(表1参照)。これらの用いる認知方略の違いによって、個人特性や動機づけ、精神的健康などが異なることが認められている(e.g., 光浪, 2010; 細越・小玉, 2009)。

認知方略は課題場面の領域に特化したもので状況次第で変化するとされている(Norem, 2001)。また、光浪(2009)の研究でも認知方略ごとに達成目標が異なることが認められている。このことから、認知方略ごとに出来事的重要性が行動に与える影響に違いがあると考えられる。

本研究では、同様に悲観的である防衛的悲観主義と真の悲観主義において、動機づけが対処行動に与える影響が異なっているかを検討することを目的とする。

方 法

調査協力者 A大学の大学生255名を対象に行った。その後、回答に不備があったものを除いた。その結果、246名(男性93名, 女性153名)を分析対象者とした。

調査時期 学年末試験直前である2014年1月末に行った。

調査方法 大学の講義時間を利用して質問紙の配布を行った。

質問紙構成 フェイスシート 学年, 学科, 性別, を尋ねた。

(1)防衛的悲観主義; 荒木(2008)の防衛的悲観主義尺度を用いた。因子は悲観12項目, 過去の成績4項目, 成功熟考5項目, 努力3項目について5件法での回答を求めた。(2)自己決定感; 岡田・中谷(2006)の学習動機づけ尺度を用いた。因

子は統合的調整12項目, 同一化的調整4項目, 取り入的調整14項目, 外的調整3項目について5件法での回答を求めた。(3)目標志向性; 光浪(2009)がElliot & ChurchのThe Achievement Motive Scaleを翻訳したものを使用した。因子は熟達目標8項目, 遂行接近目標6項目, 遂行回避目標3項目について5件法での回答を求めた。(4)対処行動; Takeuchi & Greenglass(2004)のThe Proactive Coping Inventory:日本語版の下位尺度の内省的コーピング, 計画的コーピング, 予防的コーピング, 回避的コーピングの項目を試験場面に適した質問項目に改編し, 適さない項目は除外した。因子分析をおこない, 場面想定, 準備, 諦めの3つの因子となった。

結果と考察

各尺度を探索的因子分析をして, 因子得点を算出した。認知方略を分類するために, 悲観, 成功熟考, 過去の成績, 努力の因子を用いて, クラスタ分析によって4つのクラスタに分類した。結果は荒木(2008)とほぼ同様の結果であった。

認知方略を4つの母集団として多母集団共分散構造分析を行った。モデルの適合度指標は $\chi^2(33)=17.92, p<.98, GFI=.98, AGFI=.90, CFI=1.00, RMSEA=.00$ であった。防衛的悲観主義と真の悲観主義のパスを図に示す。統合的, 同一化的調整から熟達目標や成功達成目標への正の影響は各認知方略に認められた。また, 防衛的悲観主義において, 同一化的から準備へのパスが確認された。これは, 課題の社会的価値が準備行動を促進すると考えられる。さらに, 成功達成, 失敗回避から準備へのパスが確認され, 課題場面の成否を気にして準備活動をしていると考えられる。一方, 真の悲観主義において, 準備への回帰は熟達目標の負の影響のみであり, その課題について興味, 関心がある場合において準備行動が促進されることが明らかとなった。

1) 回帰係数は非標準化回帰係数を示している。上記が防衛的悲観主義, 下記が真の悲観主義の回帰係数である。

2) 統合的から場面想定へ回帰, 同一化的から熟達目標へ回帰, 熟達目標と成功達成の共分散は等値制約をおこなっている。

図1 認知方略における動機づけと対処行動との関係